

小坂古墳群からの出土品見学と 北陸最古の寺院跡をめぐる！

【行 程】

小坂公民館⇒⇒⇒⇒野々市市ふるさと歴史館⇒⇒⇒⇒末松廃寺跡(国指定史跡)⇒⇒
⇒⇒⇒⇒<昼食・加賀料理加能>⇒⇒⇒⇒県埋蔵文化財センター(土偶づくり)⇒⇒⇒⇒
⇒⇒⇒⇒県立歴史博物館⇒⇒⇒⇒小坂公民館

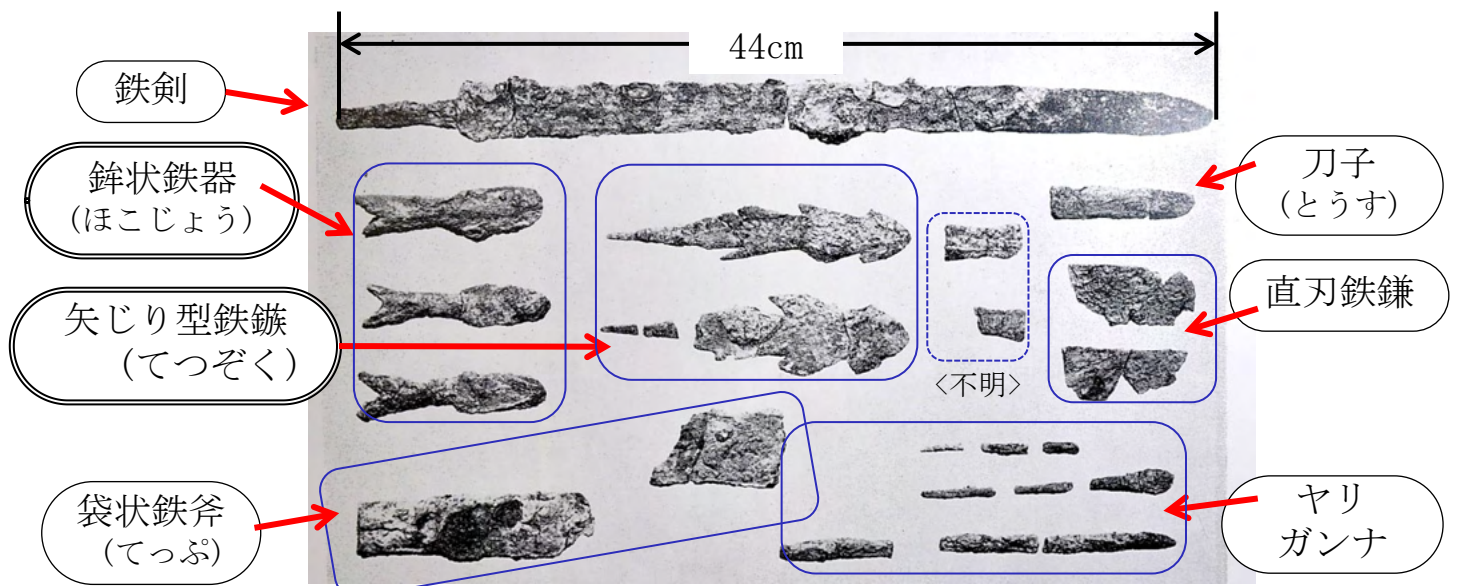
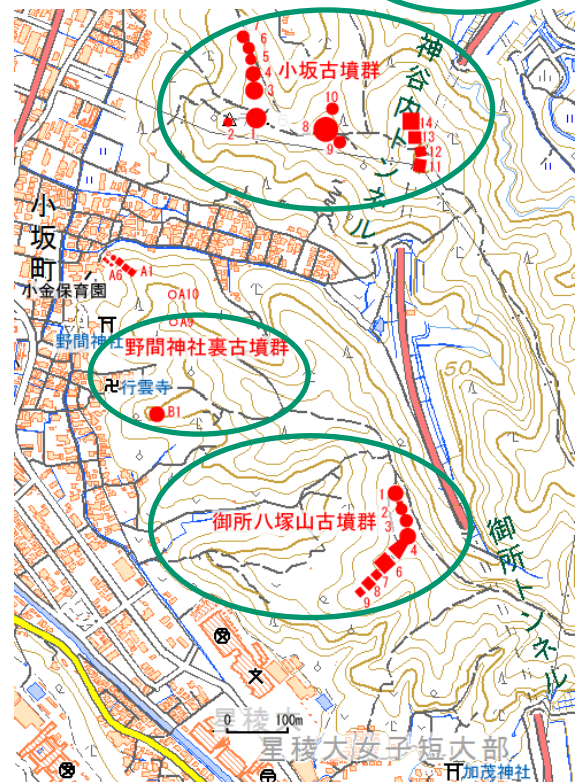
神谷内
古墳群

小坂古墳群について

- 1) 小坂古墳群は、1号墳～14号墳まであり、円墳が10基と方墳が4基である。
- 2) 大きいのは1号墳で、東西23メートル、南北25メートル、高さ4メートルの円墳である。
- 3) 築造年代は、5世紀前葉頃と推定される。
(古墳時代は、3世紀中頃～7世紀)
- 4) 1号墳の上に、鎌倉時代前期(13世紀前半)の経塚があり、珠洲焼のかめに青銅製の経筒2本が入っていた。(次ページ参照)

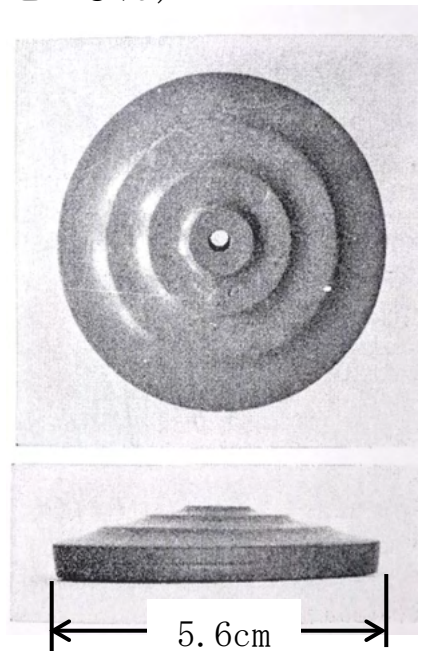
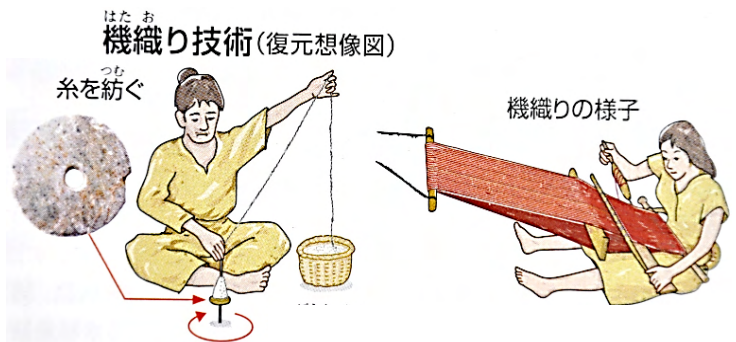
===1号墳について===

- 1) 墳丘の上に穴を掘って、その中に木で作ったお棺を直接安置する木棺直葬(もっかんじきそう)である。
- 2) 木棺の形は、割竹形系あるいは舟形系である。
- 3) 木棺は二基30cm間隔をおいて並列に並べられ、二人の豪族が葬られていた。
- 4) 副葬品は、一号棺からのみで、人体埋葬部分に赤色顔料の薄い層が発見され、右脇に切先を足元に向けた鉄剣と鉄鏃(てつぞく)が一列に置かれていた。
- 5) また、左腰あたりに石製紡錘車1個が置かれていた。(次ページ参照)
- 6) 埴輪(はにわ)は確認されず。その他は、以下の鉄製品であった。



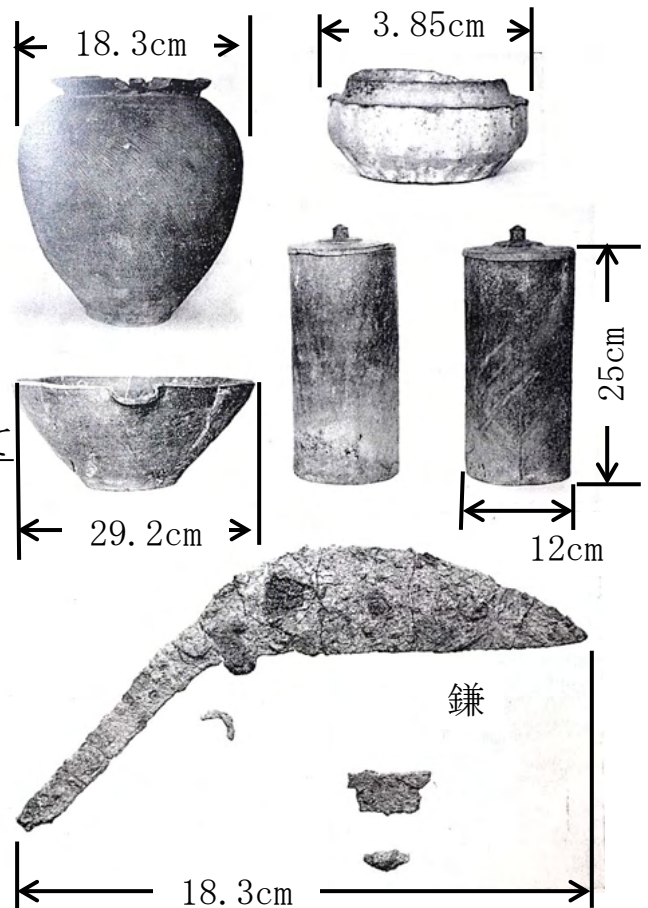
=== 紡錘車形石製品 (ぼうすいしゃがたせきせいひん) ===

- 1) 古墳時代4世紀頃に造られたもので、大きさは直径5.6cm、高1.2cmである。
- 2) 紡錘車は、糸に撚りかけるときの“はずみ車”で古墳から出土する紡錘車の多くは実用品ではなく、緑色の石(碧玉 へきぎょく)で作られた副葬品である。
- 3) この石製品はイモガイなどの貝製の装飾具をまねて作られ、儀式を行うときの装飾に用いられている。



=== 経塚と経筒・合子(ごうす) ===

- 1) 経塚は、鎌倉時代前期に、当時“小坂庄”と呼ばれていたこの辺り一帯の権力者が築いたと思われる。
- 2) 経塚の中から珠洲焼のかめが見つかり、かめの上には、すり鉢を逆さまにかぶせて蓋としていた。(平安時代12世紀)
- 3) その中に、青銅製の茶筒形で蓋付の経筒2個が収められていた。(鎌倉時代)
- 4) 2個の経筒の中には、経典は形が無くなっていたが、それぞれに経軸が残っていた。
- 5) 副葬品として、鉄製の刀子と鎌、直径3.85cmの青白磁の合子が出土した。
(合子は、身と蓋がきっちりとかみ合ったお椀型の容器のことで、中国福建省辺りで作られたものと考えられる。)
- 6) 最古の経塚は、平安後期(1007)、藤原道長が吉野の金峰山(きんぷせん)に参拝して自ら書き写した法華経などの経巻を土中に埋めたもの。(国宝・京都国立博物館所蔵)



末松廃寺と広坂廃寺の瓦について



軒丸瓦

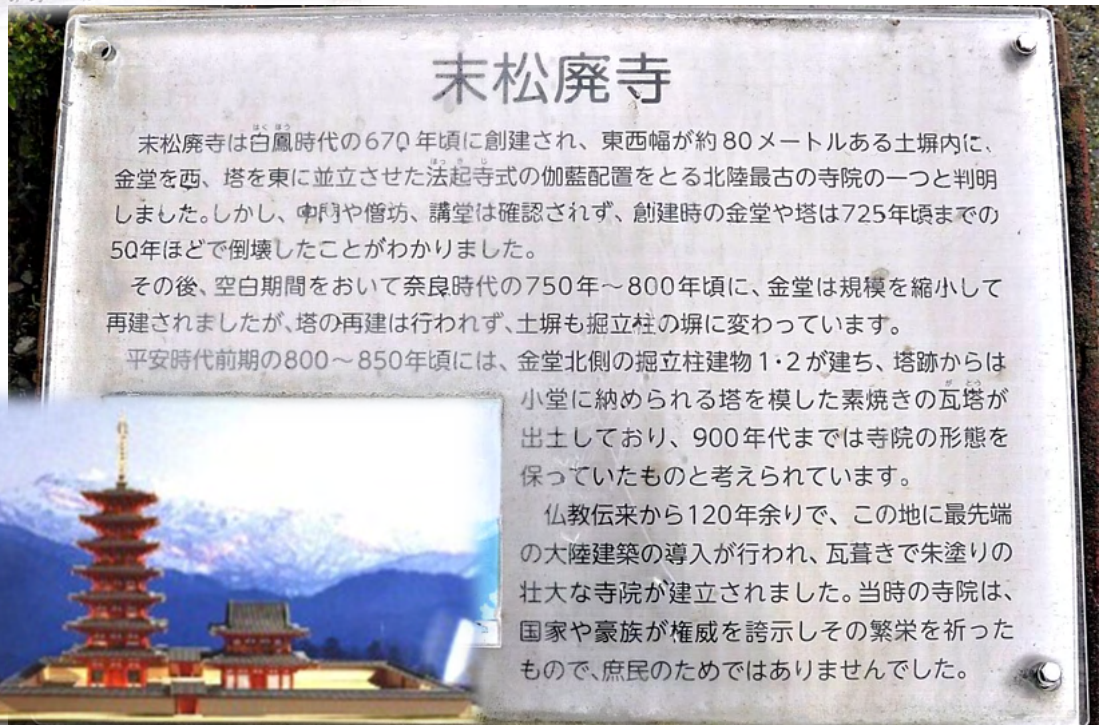
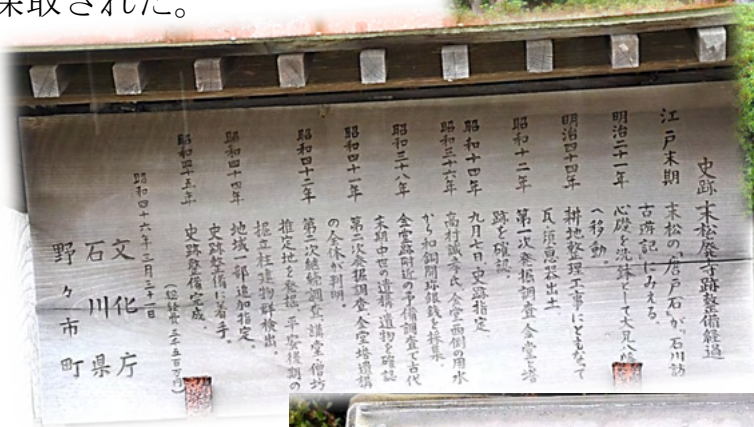
- 1) 末松廃寺⇒7世紀後半に辰口町の湯屋窯から供給されていた。
- 2) 広坂廃寺⇒8世紀前半に森本の観法寺窯から供給され、本格的な瓦葺き寺院の存在を裏付ける多量の軒丸瓦や軒平瓦が出土されている。これは、当時の奈良や京の都から出土した屋根瓦と類例のあるものである。

末松廃寺 (1/3)

撮影日 2021-07-06

1939年(昭和14年)県内初の国史跡に指定を受けた。

1961年(昭和36年)国内で2例目の銀銭の和同開珎が採取された。



掘立柱建物跡3

この場所では掘立柱建物跡が2棟重なって見つかりました。白い石を敷きつめた部分の建物が老朽化したので、新たに黒い石を敷きつめた部分の建物が建てられました。全容はわかりませんが、いずれも梁間は2間(柱間1.8m)で桁行は2間以上と推測されます。

掘立柱建物は、直接地面に柱が埋まっているので根元が腐りやすく、20~30年たつと建て替えが必要でした。この2棟の建物は、金堂再建時の石敷と方位が一致(平行)しており、同時に建っていたと思われます。

東側建物跡の一隅で見つかった炉跡は、この建物がなくなった後のもので、摺鉢状の穴から木炭や焼土に混じって多量の鉄滓(かなくそ)と藕(ふいご)が出土したので、鉄の精練場と考えられます。



史跡 末松廃寺

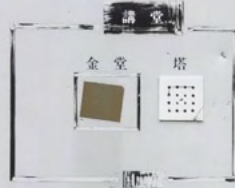
末松廃寺は、戦前、戦後の大がかりな発掘調査によって、遺跡のほぼ全体の状況が明らかになり、県下で最初の史跡公園（二三、〇七一平方米）として整備された。

二町四方と推定される寺域の中央の東に仏舎利を納める塔、西に本尊を安置する金堂を配した白鳳時代後期の寺院跡で、堂・塔の配置はいわゆる法起寺式伽藍構成をとっている。

堂塔の四周から多量に出土した瓦の中で軒丸瓦は地方色豊かな一種類である。また、寺域内から和銅開珎の銀銭、須恵器の高坏やつぼなど貴重な遺物が発見されている。

末松廃寺は国家政策として行う新規の開発を進めるための象徴として建立され、建立者は周辺を支配していた道君や南加賀の財部造と考えられている。

河川の氾濫がはげしい手取川扇状地の開発にとりくんだ多数の農民と地方豪族の壮大な記念碑ともいえよう。



【塔】 柱間二尺二寸（二、六米）等間の規模から、七重塔とも考えられる。心礎は二四×一六五の安山岩のほぼ中央に径五八センチ、深さ十二センチの凹形の孔がある。十六個の柱状の赤戸室石は柱を、四角の青戸室石は礎石を表示している。

【金堂】 基礎の周囲に素掘りの溝がめぐり、創建時の屋根にふいた瓦が堆積していた。斜めにコンクリート平板で表示されている部分は奈良時代建造物の玉石敷の跡である。

掘立柱建物跡1・2

掘立柱建物は、柱が礎石や土台の上に立てられず、地面に穴を掘りその中に柱の根元を埋め込んで建てられた建物です。

発掘調査では5棟の掘立柱建物跡が見つかっています。いずれも平安時代後期に建てられたもので、末松廃寺が再建された時と関連があります。

西側の掘立柱建物は、桁行4間（柱間2.4m）、梁間2間（柱間2.4m）でこの4面に縁（庇）がついた建物です。柱穴が長方形に2重に並んでおり、内側が母屋の部分で、このまわりが縁（庇）の部分です。平面積が104.8㎡でこの時代の建物としては大きな規模です。東側の掘立柱建物は桁行4間（柱間1.8m）、梁間2間（柱間1.8m）で母屋だけの建物です。

建物の用途ははっきりしていませんが、庶民が住んだ竪穴式の掘立小屋とは著しい格差があります。



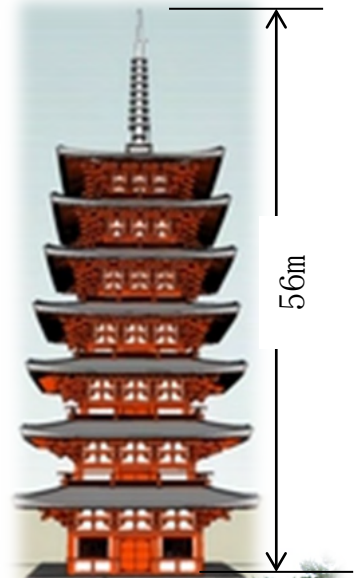


塔

塔は仏陀の舎利（骨）または聖なる遺物を納めた建物です。初重は中央の心柱を囲む4本の四天柱と外側の12本の側柱が12尺（3.8m）の等間隔で3間×3間に配置される構造です。初重の一边は36尺（10.8m）と大きく、白鳳時代としては異例の規模であることから、塔は七重塔とも考えられており、高さは186.7尺（56m）と推定されています。

心柱の礎石である心礎には、長径2.24m、短径1.65mの手取川の転石と思われる安山岩が用いられており、上部には心柱を受ける径58cm、深さ11cmの孔が作られています。この心礎は「唐戸石」と呼ばれて、古くから存在が知られており、江戸時代後期の「石川訪古遊記」には、水田中の心礎を金沢本願寺別院へ遷そうとしたが、地中に埋まって動かず、運ぶことができなかった逸話が記されています。

塔跡の中央からは、塔の代わりとした平安時代前期の800～850年頃の素焼きの瓦塔が出土しており、創建後50年余りで倒壊した雄大な塔は、再建できなかったことがわかりました。



心 礎

金 堂

寺院は、ふつう金堂、塔、中門、回廊、僧房などの建物によって構成されています。これらの建物は、粘土を盛って固めた基壇（土台）の上に建てられました。末松廃寺は金堂を西、塔を東に配置する法起寺式伽藍構成となっていたことがわかったのですが、他の建物は見つかりませんでした。

金堂は本尊を安置する仏殿で、寺院の中心となる建物です。この堂において、いろいろな法会や礼拝が行なわれました。金堂の基壇は東西20m、南北18.5mの大きさで、まわりには素堀りの雨落溝がめぐり、創建時の屋根に葺かれた瓦が多量に堆積していました。とくに、この金堂の西側で瓦に混じって銀の和同開珎（708年鑄造とされる）1枚が発見され全国的に注目されました。

基壇にコンクリート平板で斜めに表示されている部分は、平安時代後期に金堂が再建された時の玉石敷の跡を示したものです。

（東西14m、南北10.5m）



<～紀元前14,400年頃>

<紀元前350年頃～250> <250～592>

旧石器	縄文 (約14,000年)	弥生 (約600年)	古墳 (320年)
-----	------------------	---------------	--------------

丘陵上で石器を使った生活が始まる

定住的な生活のはじまり

大型竪穴住居が出現する

中期
上山田貝塚

後期～晩期

御経塚遺跡

チカモリ遺跡・巨大木柱列

院内勅使塚古墳・須曾蝦夷穴古墳

小田中親王塚古墳・亀塚古墳

神谷内・野間神社裏・八塚山古墳群

小坂古墳群・一号墳出土品

520
継体天皇・加茂別雷神を御所加茂神社へ遷座

570
高句麗の使節・国書を携えて加賀へ漂着

※高句麗の使者が加賀の海岸へ漂着したさい、道君が「私が倭国の天皇です」と偽り、貢物を横取りした。そして、贅沢な暮らしをしていた。不振をもった江沼臣(えぬまのおみ)が急きょ大和政権へ報告し悪事がばれた。

<592～710> 飛鳥 (118年)	<710～794> 奈良 (84年)	<794～1185> 平安 (390年)	<1185～1333> 鎌倉 (148年)	<1336～1573> 室町 (237年)	
				南北朝 (56年)	

670頃

末松に寺院建立

718

越前国から能登国立国

746

大伴家持が越中国司就任

823

越前国から加賀国立国

849

加茂遺跡・加賀郡勝示札

1183

木曾義仲・俱利伽羅峠合戦

前期

小坂一号墳・経塚

1221

承久の乱・順徳上皇ゆかりの地

1335

二条師基・加賀国司として小坂の庄へ着任

1338

新田義貞・燈明寺畷で戦死

750年～800年頃

金堂は、規模を縮小して再建

725年頃

金堂・塔は倒壊

約50年間